すなお

令和３年３月号

おやのことば

さしづはいつとても変わらん。
一度の諭に生涯の理まで諭してある。理のある限り神のさしづの理は変わらん。・・・
何が間違う、こうが間違うと思う心が間違う。

明治二九年五月一日

会　長

この三月十一日には、東日本大震災の発生から十年という節目を迎えました。発生後に救援活動へと行かせていただいてからそんなに日が経ったのかとも思いますが、あるテレビのインタビューで現地の方が「私たちにとっては十年が経ったからといって何の節目でもありません」と言っておられた言葉がとても印象に残りました。外から見れば節目かもしれませんが、現地での日々を考えれば十年経ったからといって何かが変わる訳ではないということです。確かにその通りです。でも、これを機会にいろいろと思案はしたいと思います。

明日がどんな日になるか、これは誰にも分かりません。分かったつもりで予定を立て準備をしますが、この世の誰一人明日のことは分からないのです。だからといって不安になるのではなく、目が覚めた今日の日を楽しみ喜んで生きることを親神様は願っておられるのです。

この時期になると卒業があり、入学や就職など新しいことへの変化の時期を迎えます。時に人は人生の行き先を迷い、悩むことがあります。

（次ページへ）

でも、私は震災の後から「悩むことができることは苦しみではなく、嬉しいことだ」と若い人たちに話をするようになりました。それは震災後の現地の報道を聞いた際に「卒業後は大学へ行こうと思っていましたが、、、」とか「就職が決まっていましたが、その会社が流されてしまい、、、」予定していたことが一瞬で変わってしまい、どうしようとか悩む間も悩む選択肢も無い中で必死に生きておられる姿を度々見ました。その時に今までの私は幸せだったのだと感じました。

よく考えてみればそうです。今日はあれをしようかこれをしようかと考えられる。この事こそ本当に幸せですし、また、選択肢があるからこそ、悩む事ができるし迷う事もできるのです。それが分かれば悩む事も迷う事も喜びになります。そして受験生にもたびたびこの話をしました。「受験生が大変なんじゃない。皆が健康で世の中が平和だからこそ、勉強ができる。そして親が元気で働いてくれるおかげでもある」と言うとその子達の眼の色が変わります。それまでは「受験生は大変。だから頑張りなさい」と言い続けられ、いつの間にか自分も大変なんだと思い込んでいる。決してそうではありません。このことは当人も分からなければなりませんが、周囲の大人達も分からなければなりません。

今日この日を迎えられたことをもっともっと喜び味わって生きて行きましょう。

宝物の一日

椿　信代

この季節になると数年前のバレンタインで催事エリアへチョコを買いに行ったときのことを思い出します。その時はお店に若い女性と男性スタッフの2名がいたのですが、私が買った商品を女性スタッフが袋に入れてくれた時、指を切って血が出てしまったのが見えました。

すぐ男性スタッフに絆創膏がないか確認していましたが持っておらず。血のにじむ指で会計をしてくれるのが申し訳なくて、私は持ち歩いていた絆創膏を1枚出してその方に渡しました。その女性はまさか客から絆創膏を差し出されるとは思わなかったという顔で驚いていましたが「本当にありがとうございます！」と受け取ってくれました。

時間にすればほんの2～3分間の出来事が、あれからずっと自分の心に残っています。親切にされたことよりしてあげたことの方が記憶に残り、ずっと良かったなあという気持ちになる気がします。

年配の方へ手を差し伸べたり、不慣れな人に道を伝えたり、そうして感謝の言葉をいただいた日は人生の中でも宝物の一日になりました。人を助けて自分も幸せになれる生き方をしたいと思い返しました。

”心の温度を上げよう”

『朝の信仰読本』　中山慶純著

以前、一ヶ月生になったばかりの修養科生から、
「修養科に修学旅行はありますか？」
と尋ねられたことがありました。
「修学旅行はないけれど、史跡見学で教祖のご生家を訪ねるときと、布教実修の日はバスに乗るで」
と答えると、
「困ったなあ。私、バスにめっぽう弱いんです。それはもう、横綱級の弱さで」
「横綱級？それは相当やな。日馬富士くらいか？」
「いえ、白鵬です。（ハクホウデス、、、、吐クホウデス）」
「なんや、ダジャレかいな」
肩の力が抜けて、思わず笑ってしまいました。聞けば、彼はいつもこのようなジョークで周囲の人たちを笑わせて、和やかにしているとのことでした。明るい言葉で人を楽しませるのは、いいことですね。

私は常々、みなさんに「”陽気ぐらし流”で日々を通りましょう」という話をしています。この教えは陽気ぐらしが目標ですから、明るく陽気でなければいけません。人生いろいろあるけれど、悲しみや怒りは陽気ぐらしの流れを止めてしまいますから、喜べること、楽しいこと、勇めることを探しながら毎日を生きる。しかも、自分だけが楽しく過ごすのではなく、温かい言葉がけや気配りをして周囲の人を勇ませ、明るくする。これが陽気ぐらし流の生き方です。
そのために大切なのは、温かい心です。温かい言葉や気配りは、温かい心から生まれます。私たちの周囲を見ても、人を思いやることのできる人は、心が温かく感じますよね。反対に、「冷たい人だな」と感じる人は、たいてい周囲を無視しています。
教祖は、私たちに「冷たい心はだめだよ。温かい心になりなさいよ」という意味のことを仰っています。人間の体は、体温が一度下がると免疫力が30パーセント低下し、反対に一度上がると５、６倍にも上昇して、病気にかかりにくくなるそうです。私たちようぼくは、体だけでなく”心の温度”を上げる努力をして、教祖の思いに沿わせていただきたいものです。
心の温度を上げる一番の方法は、周りをよく見て、困っている人がいたら、ためらうことなく、すぐに手助けをさせてもらうことです。
親神様はいつも「この人は、温かい心で動いているかな？」と、私たち一人ひとりの心づかいをご覧になっています。日々起きるさまざまな出来事に対して、どんな心を使うのかが、運命の分かれ道でもあります。他人を思いやる真実の行いができるようになればなるほど、心の温度は自然と上がり、その分、陽気ぐらしに一歩近づくのです。

中和大教会創立130周年記念祭 執行
令和3年10月10日(日)

すなお（立教１８４年３月号）

通　巻　№728
発行所　天理教瀬戸路分教会
794-0007　今治市近見町4-5-10
☎　0898-23-5004
FAX　0898-23-5123
発 行 日　2021.3.16
責任者　二 宮 英 治